学校だより　１０月号

横浜市立菊名小学校　令和４年９月３０日

「自分ごと」が力になる

校長　野間　義晴

「校長先生これ、あげる。ふうせんかずらの種なんです。」

これはある朝、登校指導しているときの話です。子どもから小さな小さな種をもらいました。ほんのわずかなやりとりですが、とても印象的でした。ふうせんかずらは、フェンスなどに巻きひげで絡みつきながら繁っていく草です。夏に緑がかった白色の小さな花を咲かせ、その後、紙風船のようにかわいらしい袋状の実をつけます。環境を考えグリーンカーテンとしても活用されています。

さて環境というと、最近は記録的な大雨が相次ぎ、多くの被害に心が痛みます。いつ私たちのまちにも猛烈な雨が降り続き、土砂災害や浸水被害が来てもおかしくありません。心よりお見舞い申し上げます。

４年生が社会科で地域の災害について、鶴見川の氾濫を事例に学習していました。鶴見川はその昔、ご存知の通り「暴れ川」として氾濫を繰り返してきました。港北区でも甚大な被害があったことが記録されています。しかし近年では氾濫することもなく、川の決壊などどこ吹く風です。その変化に子どもたちは、誰がどんなことをしたのだろうと、「問い」が生まれ調べていきました。一見わかりそうだけれどもわからない、その境界線のほんの少し外側に気づくことで好奇心をくすぐられ、関心が高まっていくのです。だから、子どもは、言われなくても「調べたい。」と動き出したのです。こうした「〇〇したい。」という希望や願望を増やしていくことが大事であると考えます。鶴見川流域センターの方や区役所の方にもオンラインや取材を通して教えてもらい、国や県、市が新横浜をはじめ多くの遊水池が作られたり、川の護岸を整備したりしてきたことが治水として効果をあげてきている事実がわかりました。ハザードマップで自分の家の位置と照らし合わせながら、洪水はなくても内水氾濫で大変なことが起きそうと、次なる「問い」に突き当たり、自分たちにできることを考え始めました。

このように、追究の過程において「自分ごと」として考えていくようになっていくことが大切な学びどころなのです。これは４年生の社会科に限ったことではなく、どの学習でも、事実や知識だけでなく、そこから自分はどうしていくべきかを考えることが求められています。「自分ごと」になっていくことは、生活と結びついていくこと、生活即教育とも言えるでしょう。生活は、「生」も「活」もどちらも「いきる」と読みますが、「自分ごと」になっていくことで、まさに「いきた教育」になっていくのです。

コロナによっても制約が生まれている今、よりよく生きることがさまざまな場面で考えられています。そこには、いわゆる認知的な能力だけではなく、非認知な能力が生涯にわたって重要であるとされます。常に変化する世の中において、どのような変化を遂げ、よりよい社会を目指していけるかということだと思います。「問い」が生まれるから、わかる。そしてその「問い」が次の「問い」をうみだしていく。丁度、ふうせんかずらが種を宿していくように、よりよい未来を創る循環が、菊名小の教育活動に生まれてきています。